

[調査報告] 国際キリスト教学アンケート調査 20期生卒業を迎えて

岩田三枝子

(東京基督教大学専任講師)

1 初めに

1990年東京基督教大学（Tokyo Christian University 以下、TCU）設置と同時に開設された国際キリスト教学科は、2008年に国際キリスト教学専攻（以下、国キ）となり、2013年3月に卒業した国キ20期生までの卒業生の総数は276名となった。

TCUの基本理念の一つであるキリスト教世界観を土台として国際化時代にふさわしい人材育成を掲げてきた国キであるが、この20期生の卒業を一つの節目として、国キ学が掲げてきた理念が卒業生たちにどのような形で実現されているかを確認するためのアンケート調査を実施した。本調査報告によって、国キのこれまでの24年間の歩みを振り返りつつ、今後のさらなる発展のための課題を検討したい¹。

2 国際キリスト教学の歩み

2013年度版のTCU大学案内によると、国キの目指すところは「神学的視点と国際的視点を兼ねそなえ、国内はもとより、世界、特にアジアで、教育、出版、宣教、奉仕など様々な活動において、指導的な役割を果たしうる人材を養成すること」²とある。この国キのビジョンは、どのような形でTCUの中で形成されてきたのだろうか。

以下に、国キの歩みを三期に区分してたどりたい。第一期は、国キ設置に向けてその学科名が『学園報』に初めて記載された1985年から、完成年度を迎える1993年までの国キ理念形成期である。第二期は、新カリキュラムが開始した1994年から、提供されるカリキュラムやプログラムが充実していく2005年までの国キ理念充実

1 本アンケート調査は、学長室主導のもと、国キ学専攻所属教員が中心となって行った。

2 『学校案内』東京基督教大学、2013年、26頁

期である。そして第三期は、倉沢正則・現学長が就任し、国キのアイデンティティ強化が打ち出される2006年以降から現在までの国キ理念強化期とした。

(1) 第一期：国キ理念形成期（1985-93年）

① 「世界」における多様な領域における働きを目指して

1980年、東京キリスト教短期大学（Tokyo Christian College 以下、TCC）、日本基督神学校、共立女子聖書学院の三校合同と同時に発刊が始まった東京キリスト教学園の『東京キリスト教学園報』（以下、『学園報』）であるが、1985年の『学園報』で初めて「国際キリスト教学科」の学科名が登場する³。ここでは、当時設置準備が進められていた国キ学科の目的について、「国際的にも通用する器、特に世界宣教の視野に立って、アジアの教会、国々との交流を深め、使命を果たす働き人が出ること」と記載している。ここでは、「宣教」や「使命」の具体的な定義や職種は明記されていないが、神学部の中のもう一学科である神学科の使命として、「より優秀な牧師、伝道師、宣教師が教育訓練されること」と明記されていることから、それとは区別される国キの「使命」は、牧師、伝道師、宣教師といった従来の制度的教会の働きにとらわれない領域を想定していると考えられよう。

また、1987年発行のTCC紀要『論集』にも国キの学科名が登場する。ここでは、「これからの神学部の課題は、本来の牧師・伝道師という教職者を育てる任務と国内はもとより海外においても、積極的に奉仕活動に参加しつつ生きた国際人としてコントリビュートできる人材を生み出す任務の両方を担うべきであり」、「神学部の中に、神学科と並んで国際的に共に働く人材の育成を目指す学科（仮称・国際キリスト教学科）が、創設されるように望んで止まない」⁴として国キのビジョンが描かれている。

また、1990年頃の大学案内では、初代国キ学科長である湊晶子氏が「神学的視点と国際的視点を兼ねそなえ、国内はもとより、世界、とくにアジアで宣教、教育、出版、報道、福祉など様々な分野において指導的役割を果たし得る人材の養成を目指す学科です。特に、聖書に基づく人間教育により、国際社会において愛の奉仕のできる人材、異文化に対する理解と尊厳の念を正しく持って、国際平和に具体的に

3 『東京キリスト教学園報』第18号、東京キリスト教学園、1985年10月、1頁

4 湊晶子「国際化時代における神学教育の課題」（『論集』第19号、東京キリスト教短期大学、1987年、8頁）

貢献できる人材、国際語としての英語力を身につけて、異文化間のコミュニケーションを深める人材の育成が、この学科の特質とするところだ」と、国キの特徴を示している。

これらの1985年から1990年頃までに示された国キ学科説明の記述から、国キは特に二つの点に特徴の置かれた学科として開設されたことがわかる。第一は、「国際」または「世界」といった、日本国外にも向けられた視点である。第二は、「宣教、教育、出版、宣教、奉仕」の分野で、「奉仕活動に参加しつつ生きた国際人としてコントリビュートできる」人材を養成する、という点である。これは、「宣教」を筆頭に置くことによって宣教の働きを重視しつつも、一方の神学科が掲げる「牧師、宣教師」といった従来の制度的教会よりも広い領域において仕えるキリスト者の養成を目指す特徴であるといえるだろう。

②「キリストがすべて」に基づく諸学問の統合

このように、国キ学科を神学部の中に位置づけることは、TCUの前身であるTCCにはなかった新しい試みであったが、このことについて、当初は内部に当惑があったことを示唆する記述もある。TCU初代学長である丸山忠孝氏は、TCU紀要『キリストと世界』の創刊号において「神学大学の理念」と題して、新設の神学大学として神学科と国キ学科の両学科を設置する課題と意義を論じているが、その中で、国キ学科は「新しい学問の分野」であり、ゆえに「社会科学の方法論によって成立する国際関係論や国際文化論を学ぶ国キ学科を一つの神学部の中でどのように調和するか、といった内部課題に直面している」⁵と記す。

ここで丸山元学長は「社会科学の方法論」である国キ学科と従来の神学との「調和」を課題とするが⁶、それに対して丸山元学長自身が一つの方向性を示している。それは、TCUの大学ロゴでもありモットーである「キリストがすべて(コロサイ3:11)」を学問の根拠とする、という方向性である。丸山元学長は、『「キリストがすべて」とする学問の樹立を目指す方向」と、『「キリストがすべてのうちにおられる」というキリストの世界における遍在の事実』を指摘するが、『「キリストがすべて」とする学問の樹立」⁷とはすなわち、社会科学を神の世界から切り離されたものとして扱うのではなく、社会科学もまた神の世界の内に存在し、社会科学の内にもキリスト

5 丸山忠孝「神学大学の理念」(『キリストと世界』第1号、東京基督教大学、1991年、14頁)

6 丸山、前掲論文、14頁

7 丸山、前掲論文、2-16頁

の支配があり、学問としての社会科学もまたキリストに仕えるものである、との理解に基づいて行う学問の営みだといえるだろう。

③ なぜ神学部の中に設置するのか

湊元学科長は、神学部の中に国キを位置づける意義については、「一般大学における国際学部の強調点が国際関係論、国際文化論的視点に集中しているなかで、内面的、精神的な面を積極的に強調しつつ国際的にコントリビュートできる人材を生み出し得るのは、神学部においてである」⁸と説明する。また、「国際化を人間論にまで掘り下げ、精神的な問題として捉えようと各方面で努力しているのに、この分野を主題としている神学の分野で、神学的レベルでの的確な対処を怠ったならば、キリスト教界は国際化に大幅な遅れをとるであろう」とし、「内面的、精神的な面」や「人間論」と得意とする神学の分野においてこそ、国際関係の学科を設置するべきであると説く⁹。

この「国際的にコントリビュートできる人材」とは、湊元学科長によると、第一に「自国の文化と異文化を比較し、自己のアイデンティティ（Identity - 正体）を明確につかむこと」であり、第二に「単に外国語を駆使できる人という意味ではなく、共通の価値観を見出して、しかも自由に交流できる人」だとしている。湊元学科長は、本来の国際化の在り方とは、「国際化を人間論にまで掘り下げ」¹⁰ることだとするが、それはつまり、人間理解こそが国際化の出発点であるともいえるだろう。まず、一人の人を理解することから国際理解は始まるということだ。人はどこから来たのか、人とは何か、人はどこへ向かおうとしているのか、という人類普遍の課題を追及することから国際理解が始める。神学において、自己のアイデンティティは、「神に創造された私」としての自己理解に基礎づけられる。そして神が創造した世界の多様性を認めつつ、しかしまたその多様性の中に、唯一の神なるお方の像に創造された者としての共通性を共有するという信仰を持つ。それは、「すべての文化の中には、人の生き方の中に神のかたちの証拠があるという肯定的な側面があるだけでなく、サタンと罪の指紋という否定的な側面もあるからである」¹¹と『ケープタウン決意表

8 湊晶子「国際化時代における神学教育の課題——国キ学科の必要性をめぐって」（文部省提出資料）、10頁

9 湊、前掲論文、5頁

10 湊、前掲論文、7頁

11 日本ローザンヌ委員会『ケープタウン決意表明』いのちのことば社、2012年、29頁

明』にも告白されているとおりである。聖書を土台とした学問を行う神学部においては、自己のアイデンティティを神の像としての自己理解に基を置き、さらに自文化と異文化の内に存在する多様性における共通項の基を神の創造に置くことが可能となる。また、世界の多様な文化について、「民族的多様性は、創造における神の賜物であ」¹²と信じるがゆえに、世界における多様性を愛する。これまでTCCが神学科として行ってきた神学的学問作業の土台の上に立ちつつ、さらにその視野を日本国外にも向け、またその領域を従来の制度的教会の外にも広げていくことにより、福音理解のより豊かな広がりや深まりを目指したといえるだろう。

それは、日本における福音派宣教の充実を示しているといえるかもしれない。つまり、1950年に発足したTCUの前身である日本クリスチャンカレッジ（以下、JCC）及び1966年に認可されたTCCの時代の在学生の中心は、戦後の西洋諸国を中心とした福音主義の宣教師たちによって宣教され、家族や親類、また地域の中で第一世のクリスチャンとなった「初穂」と呼ばれたクリスチャンたちが大多数であったと思われる。その第一世のクリスチャンたちが成長してクリスチャンホームを形成し、やがてその子供たちがクリスチャン二世として大学生世代を迎える時代が訪れる¹³。このように、福音派の日本宣教が、まずは制度的な教会を建て上げ、その教会で働く牧師を育成するという土台作りの期間を経た次段階として、クリスチャン二世代目を迎える中で、神の福音の豊かさをさらに広い世界において実現させ、またさらに多様な領域において仕えるという、次なるビジョンの一步を踏み出し始めた時期が、国キ誕生の時であったと考えてもよいだろう。

また湊元学科長は、「自国の文化と異文化を比較し、自己のアイデンティティ（Identity—正体）を明確につかむこと」と「単に外国語を駆使できる人という意味ではなく、共通の価値観を見出して、しかも自由に交流できる人」という国際化像を掲げるが、この「単に外国語を駆使できる人という意味ではなく」という点も強調したい。異文化理解とは言語能力自体であり、その言語とは特にアメリカ英語である、といった考え方は日本社会に根強いように思われる。例えば筆者の息子が通う公立保育園では、年に数回「ハローフレンズ」という「国際理解」のための時

12 日本ローザンヌ委員会、前掲書、28頁

13 例えば、2013年度の入学者39名の内、82.1%にあたる32名がクリスチャンホーム出身者であり、その割合の高さが見える。この数は、教会教職及びシニアコースへの3年次編入生を含むが、大学院への入学者は含まない。教会教職及びシニアコース入学者を含まない場合、24名の入学者の87.5%にあたる21名がクリスチャンホーム出身者となる。

間が設けられているが、そこで行われることは、文化のあり方を学ぶのではなく、「ハロー」「ハウ・アー・ユー？」といった英語言語の伝授が中心である。また、筆者の周囲にいる幼い子供を持つ母親たちの関心は、「英語という言語そのもののみを学ぶ」ことであり、「英語教室はどこそこが良い」といった会話はあっても、その英語が使用されている文化や社会への関心は少ない。また、筆者の子供の元に届く子供向け英語教材の宣伝パンフレットでは、「ネイティブの英語です」として、白人男性がイメージ写真に掲載されていることから、英語とは「アメリカ（もしくはイギリス）英語」との認識が一般的であることがうかがえる¹⁴。一方、そのような現代日本社会に浸透している一般的理解の中であって、ある自治体における小学校英語教育の取り組みは興味深い。2011年4月より小学校での英語教育が必修となり、各自治体では英語教員の獲得に苦心していると報道されている。ある自治体では、英語を第一母国語としている北米やイギリスに限定して英語教員を募集したところ教員が集まらなかったという。そこでその自治体の下した決断は、英語を第二母国語としているインドやフィリピンなども含めての英語教員の募集であった。その結果として、世界13か国出身の英語教員が集まり、その教員の授業に参加した生徒たちは、英語という語学のみならず、その教員の出身国の文化にも関心を持つようになったということであった。このような、その言語を形成している文化的背景への関心と理解こそ本来の国際化教育であり、異文化理解の始まりだといってよいだろう¹⁵。

先ほどの「単に外国語を駆使できる人という意味ではなく」という点に戻れば、TCUにおける異文化理解は、教室における言語の学びや「異文化理解入門」という机上の科目のみでは完結しない。近年、学内留学として、大学内で英語だけの授業が提供されたり、また英語を使用する留学生と寮生活で同室になる機会を提供している大学が増えているとされているが¹⁶、TCUでは2000年より英語言語での授業を行うACTS—ES (Asia Christian Theological Studies for English Speakers) プログラムが開始され、毎年5名前後のアジア、アフリカを中心とした英語言語を使用する留学生が入学し、2013年度は全学生数の22%を占める。ま

14 子供向け英語教材パンフレット「英語もっとやりたい！」(ODD01E-M) (ベネッセコーポレーション)、18頁

15 「教壇に立つのはだれ？」(『NHK クローズアップ現代』2011年5月23日放送)

16 例えば、「『寮内留学』で国際感覚学べ 留学生と同居、大学で導入」『朝日新聞』2013年3月2日(夕刊)。

た1995年からは1学期間TCUに在学する短期留学プログラムによってアメリカからの大学生がキャンパスで過ごすプログラムが開始し、この短期留学プログラムは2011年にEAI(The East Asia Institute)となり、現在はアメリカだけではなく、インドネシアや中国からの学生もこのプログラムに参加している。2013年度は18名が1学期間EAIプログラムに在学した¹⁷。これらの学生は全寮制を基本とするTCUにおいて日本人学生と寮生活を共にするため、ある学生は留学生との1年間にわたる同室での共同生活を体験することになる。寮やクラスにおいて学生たちは、言語や文化背景の違いに戸惑いながらも、「言語能力」だけでは解決し得ない異文化理解を実体験的に学ぶ。例えば、筆者の担当する国キ生の必修クラスである「日本宗教論」のクラスは、ACTS—ES及びEAIのJapanese Religion and Philosophyという必修クラスと合同になっており、毎年クラスでは受講生30名前後の内、日本語を使用する日本人学生と英語を使用する留学生がほぼ半数ずつとなっている。このクラスの最後にプロジェクトとして、日本人学生と留学生が数名ずつの混合グループを作り、各グループで日本の伝統的行事について発表してもらうことにしている。クラスの終了後の学生アンケートには、「日本人学生（または留学生）と一緒にプロジェクトをできてよかった」「留学生との共同プロジェクト準備では、コミュニケーションの取り方などの違いなどから苦労もあったが、生きた異文化理解を学べた」といった声が上がっている。これらのTCUにおける国際化の試みは、学びが単に言語の学びに終わることなく、自文化と異文化の違いの中から互いを理解する国際化、という湊元学科長が掲げたビジョンの体現化であるといえるだろう。

また、湊元学科長が「内面的、精神的な面を積極的に強調しつつ国際的にコントリビュートできる人材を生み出し得るのは、神学部においてである」とする理念は、カリキュラム構成にも反映されている。TCUのカリキュラムについて、1990年『学園報』において丸山元学長は、「聖書を基礎とする神学の学びは、神学科と国キ学科を擁する新大学のカリキュラムに見るように、一般教育の諸学と国際関係や国際文化の諸学と学際的、有効的、生命的に関与する」として、教養科目や国際関係の科目はすべて「聖書を基礎」¹⁸としており、それらの諸科目がすべて「学際的、有効的、生命的」に聖書において相互に統合されていることを示している。宗教改革者カルヴァンは、「神を知る知識とわれわれ自身を知る知識とは結び合ったことが

17 春学期には中国から4名、秋学期にはアメリカから13名、ドイツから1名となっている。

18 丸山忠孝「キリストがすべて」(『東京キリスト教学園報』東京キリスト教学園、1999年6月、2頁)

らである」¹⁹と述べたが、それはまた、神を知ることと、自己を取り巻く隣人、社会、世界について知ることがつながっていると解釈することができるのではないだろうか。神を知るとは世界を知ることであり、世界を知るとは神を知ることである。それはTCUのカリキュラムで言えば、聖書学や組織神学の学びと異文化理解等の諸科学が相互に関係しており、どちらが欠けてもどちらも理解することができない、ということではないだろうか。神学理解と国際理解の統合を目指すカリキュラムは現在の国キカリキュラム構成にも反映されており、それについては後述する。

なぜ神学部の中に国キ学を設置するのか、という問いに戻るならば、キリストが世界のすべてにおられるという視座ゆえに、世界についての学問を行う動機をもつ。そして、神の像に創造された人間とは何者かを追求する神学部の中において、自己と自文化、そして異文化における人間の在り方を学ぶ。これが、神学部における国キの存在意義といえるだろう。

④ 卒業生進路

初期の国キ卒業生の進路状況については、第一期生（94年卒業）は、教会・牧会45%、進学30%、キリスト教諸団体・諸企業35%となっており、半数近くが教会での働きについている²⁰。第二期生（95年卒業）の進路は、教会・牧会30%、進学30%、一般就職21%、宣教師5%、その他14%となっており、一期生の進路内訳と内容が多少異なるため直接比較することはできないものの、三分の一強が教会や宣教といった直接的な伝道の働きに就いていることがわかる²¹。第一期生から第三期生までは、前身のTCCの学生と共にキャンパス生活、寮生活を送っている。TCCの「目的と教育方針」は、「キリスト者である男女を牧師、伝道者およびその他のキリスト教教職者として養成すること」とされ、キリスト教教職者養成に限定している。初期の国キ卒業生の教会への高い就職率の背景にあるのは、TCCの学生と共にキャンパス生活をおこなっていた影響もあるだろうと予想される²²。いわば、最初の4年間はTCCからTCUへの移行期であったことが、卒業生の進路状況にもあらわれているといえるだろう。

19 ジャン・カルヴァン、渡辺信夫訳『キリスト教綱要』I、新教出版社、1962年、47頁

20 『東京キリスト教学園報』（東京キリスト教学園、1994年3月、5頁）

21 『東京キリスト教学園報』（東京キリスト教学園、1995年3月、5頁）

22 「東京キリスト教短期大学入学案内」1頁。

(2) 第二期：国キ理念充実期（1994-2005年）

① 新カリキュラムの開始

このようにして、新しい試みとしてはじめられた国キであり、新しい学部として出発した神学部であったが、完成年度を迎えた1994年から新カリキュラムが施行された。この新カリキュラムは、「神学科も……国キ学科も……ともに聖書の世界観に基づいて神学と異文化理解を学んでいく」²³ものとして構成されたと稲垣久和・元神学部長によって説明されている。これは、TCU開学当時、丸山元学長や湊元学科長が説いていた「聖書を基礎とした」諸学の学びを、カリキュラムとしてさらに充実させたものであったといえるだろう。稲垣元神学部長は新カリキュラムの理念をめぐる論文の中で新カリキュラムの理念について、「各文化領域で福音の真理に立っていき、かついかなる文化領域に遣わされようとも、そこで福音の宣教者となれる堅固な基礎を身につけた人材を養成」するために、神学と共に諸科学がカリキュラムに含まれる必要があると説く。さらに、「キリスト教信仰を単なる断片的な信念の寄せ集めとして捕らえないことが肝要である。信仰が包括的に、人間生活全体への展望を与えるような『キリスト教世界観』の基礎を与えるものとして把握されねばならない」²⁴として、神学と諸科学が信仰生活と分離されるのではなく、それらの学びが信仰者の内に統合されてその生き方を改革していくダイナミックなものであるべきだとする。

このような新カリキュラム開始の中での国キの目指す育成者像はどのようなものであったのだろうか。1996年『大学案内』では、倉沢正則・元国キ学科長が国キの目指すところとして、「さまざまな分野、領域で『和解の使節』として奉仕するキリストに献身した働き人を育てる」とし、また1998年『学園報』では、「実社会に分け入って、キリストの福音に生き、世界大の視野を持ち、異文化理解を身につけた宣教のスピリット溢れる人を育成」²⁵と掲げている。これらの記述から、国キ生たちの卒業後の働きの分野を「キリスト教界」の中だけに限定せずに、「さまざまな分野、領域」また「実社会」の中における働きを想定しているといえる。国

23 稲垣久和「新カリキュラムの特徴」（『東京キリスト教学園報』東京キリスト教学園、1994年6月、3頁）

24 稲垣久和「神学と諸科学—TCUカリキュラムの理念をめぐる」（『キリストと世界』第4号、東京基督教大学、1995年、6頁）

25 『東京キリスト教学園報』（東京キリスト教学園、1998年、5月、3頁）

キ開設当初は、「宣教、教育、出版、報道、福祉など様々な分野」と「宣教」が筆頭におかれていた。つまり直接的に教会で働く人材の養成を目指していた TCC と並行しながらの開設であった国キが、完成年度を迎え、「宣教」を含みながらも、さらに多様な領域における働き人を想定するようになったといえるのかもしれない。

② 異文化理解プログラムの充実

またこの時期は、国キ独自のプログラムが次々と開始し、充実していった時期でもあった。

1997年から開始された海外語学研修プログラムは、その後も国キ必修科目となっている。現在このプログラムでは、主にアメリカの大学で提供されている英語学習プログラムに1学期間相当（6週間前後）在籍し、ホームステイを経験しながら、英語と異文化を学ぶプログラムとなっている。

また、1999年からは異文化実習が開始された。これは、1か月間、異文化に滞在することにより、単に数日間の旅行で訪れるだけではない滞在者としての異文化を経験することを通して、より深い異文化理解の習得を目的としている。これまでの実習先国は、カンボジア、フィリピン、シンガポール、韓国、バングラデシュ、パプアニューギニア、インドネシア、スリランカ、中国、エチオピアとなっており、現在は卒業要件のための選択必修科目の一つである。異文化実習に関して倉沢学長は「今後は、それを担っている人の人格とか、その人自身の考え方、そういったことに学生たちが目を向けるようなプログラムのあり方がこれから必要になってくる」²⁶としているが、これも、湊氏が述べていた「国際化を人間論にまで掘り下げ」る国キとしての理念の必要性がますます求められるということだろう。

また、実践的カリキュラムの充実と共に、学問として国キの在り方を深めることを目指して、2008年より「国際キリスト教学入門」が科目として設置された。この科目は国キ生だけではなく、神学科、キリスト教公共福祉専攻学生も含む全新生の必修科目であり、国キ在籍教員数名のティームティーチングによって、キリスト教世界観の視点から国際問題や異文化理解を問う意義を共に考える場となっている。

また、国キ独自のプログラムとしてだけでなく、この時期、TCU 全体としても語学、異文化理解に関わるプログラムも開始された。1996年からは米国バイオ

26 「シンポジウム」(『東京キリスト教学園報』東京キリスト教学園、2010年12月、5頁)

ラ大学との短期留学プログラムが始まり、TCUに在籍しながら1学期間バイオラ大学への短期留学が可能となった。このプログラムは神学科学生も参加できるもので、2013年9月現在の時点ではこれまでに20名が参加し、そのうち13名が国キ生である。また、2001年からはTCUとバイオラ大学間の提携により、ダブル・ディグリー・プログラムが始まった。これにより、TCUに3年間、バイオラ大学に2年間在学することで、両大学の学位取得が可能となった。神学科の学生もこのプログラムへの参加が可能であり、これまで2名がプログラムを終了しており、そのうち1名が国キ生である。

また前述したACTS—ESプログラムは2000年から始まり、英語言語を使用するアジアやアフリカ出身の学生が一学年平均5名ほど入学し、寮生活を送るようになった。2013年度時点では、ケニヤ、ウガンダ、ジンバブエ、インド、ミャンマー、マカオ、ドイツ、アメリカから24名がこのプログラムに在籍する。このことにより、寮生活や教室における日常生活の中で異文化や英語に接する機会が、学生にとってより身近なものとなった。

③ 卒業生進路

この、新カリキュラムの元で教育を受けた五期生（1998年卒業）の進路状況は、就職26%、教会14%、進学21%、宣教団体7%、ボランティア・主婦・牧師夫人・未定29%となっている。また、六期生（1999年卒業）の進路状況は、就職29%、教会21%、アルバイト36%となっている。教会・宣教教団関連への平均は25%であり、一期生、二期生と比較すると、直接伝道に携わる働きへの進路が減少しているようにみえるが、この点に関しては後述したい²⁷。

(3) 第三期：国キ理念強化期（2006年 - 現在）

2006年に新学長となった倉沢学長によって、学科の各学科、専攻の「特色をより鮮明にする」方向が打ち出された。これにともない、国キの特色は、「国キ学専攻では、海外クリスチャン NGO 等で働く国際救済・開発分野での働き人を育成」²⁸とされた。「神学」「国際」「福祉」という各学科専攻の特色を鮮明にすることによ

27 『東京キリスト教学園報』（東京キリスト教学園、2001年3月、4頁）

28 倉沢正則「御国が来ますように」（『東京キリスト教学園報』東京キリスト教学園、2007年12月、1頁）

り²⁹、あるものを教会教職者（牧師や教会音楽主事等）に、ある者をグローバルな社会に貢献する社会人に、そしてあるものをキリスト教福祉のリーダーに整えようと励んでいる」という TCU の全体像を示している。

国キの「特色を鮮明にする」試みの一つとして、2013年度からは Big English Program が開始され、英語カリキュラムが大幅に改良され、国キ在學生は従来よりも英語の科目数が増加した。必修の英語単位数（語学研修単位は含まない）は、2012年度入学者は16単位であったが、2013年度入学者以降は25単位となっている。また、語学研修の期間も従来の6週間から、2013年度入学者以降は3か月間に延長され、さらなる語学力の習得と向上が期待されている。

ただし、現在の国キのカリキュラム構成全体は TCU 設置当時の基本理念を引きついでいる。それは「神学科も……国キ学科も……ともに聖書的世界観に基づいて神学と異文化理解を学んでいく」というカリキュラムの説明通り、例えば2013年度入学者の卒業要件124単位の内訳は、教養科目46単位、福祉科目12単位、神学科目12単位、国キ科目36単位となっており、学生は一般教養、神学、福祉、国際関係の四分野から履修して卒業していくこととなる。

この時期に国キの在り方を象徴する二点の変更があった。一点目は、2001年に国キ学科の中に設置された日本宣教コースが、2008年から神学科へと移行された点である。日本宣教コースは、「日本語を磨きつつ日本の文化に根差して神学を学ぶことにより、日本の地で宣教を志す留学生を育成することを目的と」して設置されたコースである³⁰。設置当初は、留学生を迎え入れるという点から、国際的視点によって当時の国キ学科内に設置されたコースであったが、「宣教を志す」という点からは、国際的視野を幅広く身につけ、様々な分野での福音的生き方を目指す国キよりも、聖書学や神学、また牧会学や伝道学等に力を入れている神学科の方が、直接的な教会活動や開拓伝道としての「宣教を志す」留学生の目的にふさわしいとの判断により、神学科へと移行された。

またこの時期の特筆すべき二点目としては、2008年にそれまでの国キ学科は「国際キリスト教福祉学科」となった。その学科の下に、従来の国キは「国キ専攻」として、そして新たに「キリスト教公共福祉学専攻」（以下、福祉学専攻）が加わった。福祉学専攻は、福祉分野における専門家育成の専攻である。湊晶子元国キ学科長が国キ設立の理念として1987年に「神学的視点と国際的視点を兼ねそなえ、国

29 倉沢正則「新しいTCU」（『大学報』東京基督教大学、2012年4月、1頁）

30 東京基督教大学「学部規則第3条I（ウ）」

内はもとより、世界、とくにアジアで宣教、教育、出版、報道、福祉など様々な分野において指導的役割を果たし得る人材の養成を目指す学科です³¹と述べているが、この言葉にもあらわれているように、「福祉」の分野における専門的人材育成が始まったといえる。1990年に神学部の中に神学科と国キが設置された時には、「国キ学科を一つの神学部の中でどのように調和するか、といった内部課題に直面している」³²とされた新しい試みであった国キだが、2008年に神学部の中に福祉という新しい専攻が設置された時には、「調和」に関する疑問の声は学校内外からは上がらなかった。これも、国キ設置20年近くを経て、様々な分野において福音的生き方を実現するという国キの理念が、学校内だけではなく、教会にも浸透した一つの表れと考えられるだろう。

この時期に在学した16期生（2009年卒業）の進路は、教会14%、就職43%、進学29%、その他14%であり、17期生（2010年卒業）の国キ生進路先内訳は、教会10%、就職30%、神学30%、その他30%である。教会関連への就職は、それより10年前の卒業生と比較するとさらに減少している。また一方で、神学科16期生の進路先内訳は、教会7%、就職33%、進学40%、その他20%であり、17期生の進路先内訳は、教会7%、就職80%、進学・その他13%であり、教会関連への進路は国キ生よりも少ない。このことから、教会関連への就職が減少しているのは国キ特有の現象ではなく、TCU全体の傾向であるといえるだろう。

これについては、TCUが提示する「献身者」観に関係すると考えられる。例えば、「献身」の概念に関して、1997年に稲垣元神学部長は、「TCUの内部と外部の間で『献身者』の概念をめぐる少なからぬギャップが生じているよう」とし、「様々な分野、領域」や、また「実社会」の中における働きも「献身者」の働きの場であると捉える「内部」と、教会に直接仕えるキリスト者のみを「献身者」と認識する「外部」の理解のギャップを指摘している。この理解のギャップについて、倉沢学長は、「新しい試みには戸惑いと問い直しが迫られます。その一つが『献身者』ということばでした。『献身』の聖書的意味を問い直し、『キリストへの献身』を表明した者を『献身者』と定義したのです。そして、牧師として教会に召される者、信徒として社会に召される者がいるのであって、それが社会の中にある宣教の教会を形成することであると理解するに至っています³³と説明している。このようなTCUの持つ幅広

31 湊、前掲論文、8頁

32 丸山、前掲論文、14頁

33 倉沢正則「宣教200年に向かうTCUの使命」（『東京キリスト教学園報』東京キリスト教学園、

い多様な領域における「献身者」観は、TCUの支援教会、支援者に向けて発行されている『学園報』などを通して、それまでに繰り返し説明がなされた。例えばステパノ・フランクリン元学長は、「TCUではフルタイムで奉仕する牧師と宣教師を養成したいと望みます。しかしそれだけではありません。TCUにおける神学教育を世俗世界へと運ぶキリスト者をも養成したいと望みます。卒業生の中に実業、教育、法律へ福音を運ぶ者がいることを望みます」³⁴とし、また「教育目標の一つは、教会のフルタイムの働き人のために、最高の学部教育を提供すること」であり「もう一つの教育目標は、社会で働く優れたレイマンのための、最高の学部教育を提供すること」と訴えている³⁵。先に見たように、TCU卒業生の進路先として「教会」が減少しているのは、このようなTCUのビジョンの推進度にも比例していると考えられるだろう。それは、キリストへの献身が不明確になったという消極的な意味で「教会」への就職が減少しているのではなく、むしろ、積極的な意味として、「様々な分野、領域」また「実社会」においてキリストに「献身」する者が増加したと理解できるのではないだろうか。

また一方では、卒業直後の進路だけでなく、長期的に卒業生の進路を追う必要がある。今回の国キ卒業生対象のアンケート結果では、アンケート回答者の47%が現在、またはある一時期に教会に就職していた。つまり長期的に見た場合に、牧会・教会関連への就職が減少しているということではなく、卒業後何らかの職業や経緯を経た後に神学校に入学し、牧会に就くケースも多数あることがわかる。

3 アンケート結果

次に、2012年に実施した国キ卒業生へのアンケート結果から、前述までのような国キのビジョンと取り組みが、実際に国キ生の卒業後の歩みの中でどのような役割を果たしているのかを見たい。その回答から、国キのこれまでの取り組みの意義と今後の課題を検討したい。

アンケートの実施は2012年7月～8月末であり、アンケート郵送と同時に、TCUホームページ上でもアンケートを掲載して国キ卒業生への呼びかけをおこな

2010年12月、2頁)

34 ステパノ・フランクリン『東京キリスト教学園報』（東京キリスト教学園、1999年1月、1頁）

35 ステパノ・フランクリン「TCUは神学校か？大学か？」（『東京キリスト教学園報』東京キリスト教学園、2000年3月、3頁）

った。郵送によるアンケートは、国キ学1期生から19期生までの卒業生273名のうち、住所不明者を除く205名に送付した。その結果、郵送による回答者は26名、インターネットによる回答者は25名であり、男女別にみると、女性29名、男性22名の合計51名からの回答を得た（2012年11月1日現在）。これは、全卒業生のうち、女性の約17.5%、男性の約20.4%が回答したことになり、全体としては約18.7%から回答を得たことになる。

アンケート設問と回答は下記のとおりである。

(1) 国キでの学び

「現在のあなたにとって、国キで学んだことは役に立っていると感じますか？どのような点で役に立っているか、お書き下さい」という設問に対しては、次のような回答があった。

① 異文化理解、語学、異文化実習

「異文化コミュニケーション。宣教学や異文化コミュニケーションのクラスで何度も繰り返された『メッセージを伝えるのには receptor oriented 受け手志向でなければならない』という言葉は、私が今でも良く思い出す言葉です。日本での牧会でも、アメリカの日本語教会での牧会も、その聴衆の文化を理解する事がカギとなるということを、あの当時学ぶ事が出来ました」(1期生)

「幅広い視野を持つという点で社会に出てからも役立っている。外国へ行ったり、異年齢、異教団の人々との交わりを通して、柔軟なものを見方を持つことができている」(7期生)

「異文化学習—教会内に外国の方もおり、背景や文化の違いを理解する助けになる」(16期生)

「自分と違う価値観の人と出会ったとき（もちろん日本人同士でも）、宗教観、年齢、環境、性格、以前よりも“違い”を受け入れられるようになった！」(17期生)

以上のように、国内、国外の違いに関わらず、実社会において国キで強調された異文化理解力が益となったと言及する回答がみられた。

また言語については以下のような回答があった。

「在学中専攻した授業が英語でレクチャー、ブックレポート、試験だったので大変でしたが、卒業後の職場で宣教師とのやりとりや国際部門の事務的な作業で役立ちました」(1 期生)

「TCU でのアメリカ人教授による英語での大学レベルのクラスは、私がアメリカの大学院で学ぶためのよき準備となりました」(3 期生)

「国キ学科が提供していた『英語での授業』はチャレンジングではあったが、好奇心を刺激し、交換留学、そして卒業後の海外の神学校で学ぶ門戸を開いた」(4 期生)

「英語を使用する仕事をしているので、語学研修を含め TCU で英語をしっかり学べたことは大変役立っています」(10 期生)

このように、英語の活用機会は卒業後も高いことが分かった。また、英語という言葉そのものだけではなく、その言語と異文化理解が結び付けられている回答もみられた。また英語以外にも、「国キで学んだ韓国語は、(韓国語を知る人が少ない)職場でとくに重宝されています」(16 期生)といったアジア語学学習への言及もみられた。

さらに、TCU 開学当初から実施されてきたサマーワーカー派遣、1999 年から実施された異文化実習にふれる回答もあった。

「FH³⁶ によるバングラデシュとインドのサマー・キャンプに参加。発展途上国を肌で感じる事ができたことは、人生観を変えるものがありました。また、文化に関する理解を実体験を通して深める事ができたと思っています」(5 期生)

「国キでの学びで一番良かったことは、海外経験ができたということです。1 月半のアメリカでの語学研修、3 か月の韓国での語学研修に行きました。日本人以外の感覚を肌で感じる事ができ、異文化の中での感覚が養われました」(9

36 日本国際飢餓対策機構 (Japan International Food for the Hungry) を略称したものを。

期生)

「異文化理解の学びや異文化実習に参加したことをきっかけに卒業後しばらく海外で働き、宣教の働きに関わる事、また自らの視野や価値観を広げることができました」(10期生)

「海外での滞在経験、異文化間コミュニケーションを身をもって学んだことは、具体的に自分の将来の進路を考える上で、とても助けになりました。現在の職場では、さまざまな状況に対応する(臨機応変?)ことは、色んな国に行つて、色んな経験をしたからかな?と感じています」(14期生)

「海外派遣ワーカーでミャンマーとウガンダに行つた経験です。あらゆる分野で国際化が進んでいる現代においてこれらの経験は注目されたことがあります」(16期生)

「私はシアトルやフィリピンに実際に行くことができ、世界の必要の一部をこの目で見ることができました。机上だけにとどまらないのが国キの魅力だと思っています」(18期生)

西岡力・国キ専攻長が、「若い学生のうちに海外へ出て行って、なぜこんなことが起きているのかと、答えが分からなくても問い続けてほしい。北朝鮮でもカンボジアでも、神様がいらっしゃるのになぜなのかという問いを發することしかない現場は多い。実際に現場に行つてみるのがきるとするのがTCU国キの良いところ」³⁷として、英語圏だけではない多様な国々や文化における1か月以上の異文化体験の貴重さを語るように、アンケートでは、卒業後の歩みにおいて、そのような異文化体験が有益であったと回答している。また回答からは、この在学中の異文化体験は、日本国外において役立つだけでなく、日本国内においても益となつたとされている。数年前、筆者が担当する異文化理解入門のクラスにおいて、「これまでの異文化体験をあげてください」と受講生に問いかけた際、「私は海外に行つたことがないので、異文化体験はありません」と回答した学生がいた。しかし、もはや異文化体験は日本人が日本国外で体験するだけでなく、国内での問題である。いや、一人一人が神によって創造された多様性をもっているという認識故に、一人の隣人との関係がすでに異文化理解の一步であるといつてもよいだろう。これは宮脇聡史・元専攻長が、「国内か海外かという二元論は超えていかないと。国キ専攻

37 「国際キリスト教学専攻特集 座談会」(『東京キリスト教学園報』東京キリスト教学園、2011年7月、5頁)

も日本についてもしっかり学びます。国内のボランティアには関心があるけど海外には無関心、あるいはその逆、というような線を引かない人材を育成することも課題です。日本も世界の一つ」と指摘しているように、国キが示している「世界」は「日本も含む」世界であるということが、卒業生たちの実際の姿からも明らかだろう³⁸。

以上のように、国キの学びがどのように役立っているかという設問に対しては、国キ提供科目の柱でもある、異文化理解、語学学習、異文化実習への言及が多くあった。

② 「多様な分野へ」というスピリット

また、具体的な科目やプログラムだけではなく、国キの持つ「多様な分野におけるキリスト者の働き人」というスピリットに触れる回答もみられた。

「『地の塩』として主に仕えていくということを最も深く学びました」(3期生)
「視野が広がったことは確かです。卒業前は牧師じゃなければ、宣教師じゃなければキリストの働きは担えないと考えていましたが、そうではなく、社会に生きるキリスト者こそ教会を支え、仕えるものだ実感できています。それは自分が国キ出身者であるという意識が基になっています」(5期生)

「国キのスピリット：キリスト教世界観に立脚した人材を、様々な分野に送り出していこうというビジョン。このビジョンは、非常に狭まれたキリスト教理解(福音・教会・宣教理解)を打ち破ってくれました」(5期生)

「主婦なので、仕事にいかす……というようなことはできませんが、国キにいたことで日本だけじゃなく世界に目が向けられるようになり、自分のいる場所において特に貧しい子供たちのために自分にできることは何か考え、少しでも行動に移せるようになっていきます」(14期生)

以上の回答からは、稲垣氏が述べる「信仰が包括的に、人間生活全体への展望を与える」ものとなっている姿が見えてくる。

38 「国際キリスト教学専攻特集 座談会」(『東京キリスト教学園報』東京キリスト教学園、2011年7月、5頁)

(2) 国キに期待すること

次に、「社会的経験を踏まえて、今後の国キに期待することも具体的に見えて来られたと思います。ぜひ教えて下さい」という設問については、語学（特に英語）教育の強化、異文化実習の長期化、具体的な資格取得を期待する声が上がった。また、社会とのつながりを求める意見もあった。

「英語が出来るに越したことはないと思います。『宣教師やその家族と、もっと自由にコミュニケーションが取れれば……』と残念に思うことがしばしばです」(5期生)

「実社会では、英語を使う機会は増加している。「国際」と名づけているのだから、世界共通語の英語教育に力を入れる。例えば、シアトル英語研修だが、期間が短いのが残念だった。せめて、最低でも3カ月必要だ」(18期生)

ここであがっている語学学習の強化については、前述のように、2013年度から開始したBig English Programにより、英語科目の充実や、語学留学の長期化(3か月)といったカリキュラム内容に改善されている。

また、資格取得に関しては、以下のような回答があった。

「教職課程設置は、ぜひ、実現してほしいと思います」(1期生)

「“国際的に” = 英語などの資格をもっと学生時代に身につけておけたらと思います。英語だけでなく、ほかの資格ももっと提示してもらったら、より良いかと感じます」(14期生)

「カリキュラムの問題でなかなか難しいかも知れませんが、教員免許をとれるようになればと思います」(16期生)

これについても、教職課程そのものではないが、Big English Programの一環として、2013年度よりTOEICのための専門科目が設けられたほか、国キ生は毎年TOIECを受験し、その語学力到達度を計ることとなった点は、新しい一歩である。

また、その他には、社会とのつながりを求める声として、以下のような回答があった。

「北米で日本語教会をしながら思うのは、世界中で人口が移動しており、自分の母国を離れて母語以外の地域で生きる『ディアスポラ』的な人々が増えている事です。アメリカでは勿論のこと、日本においても南米移民の方々や、アジアからの移民の方々が増えており、市役所などの政治的な対応以上にキリスト教会が、移民の方々のコミュニティの中心としての役割を持っている場合が多くあります。国キ学科が、将来、日本のキリスト教界において担って行くべき役割の一つは、この『移民の教会』（海外の日本語教会、日本にある多言語の教会）の形成の神学的、実践的な理論やモデルを提供していくことではないでしょうか」（1期生）

「重度知的障がいの子供を育てる中で、社会の中でキリスト者として福祉を考える機会が増えた。弱い立場の現実にも目を向ける国キ教育を」（5期生）

「社会人として一般企業に就職する道がさらに開かれたら良いのではないかと思います。そのために国際感覚がさらに磨かれてグローバルに活躍できる人材を育てられる学科となれば良いのではないかと思います」（9期生）

以上のように、グローバル化傾向にある社会における障害者や移民といった社会的弱者への視点が求められた。これについては従来より、神学科、国キを問わず福祉関連への進路がみられたが、特に2008年度以降、キリスト教公共福祉学専攻の開設により、全学生を対象にした「キリスト教公共福祉学入門」が必修化されたことや、チャペル等でも福祉に関するメッセージが語られたり、福祉学専攻の学生と共に受講する授業等を通して、学園全体に福祉的な視点が共有されるようになっていくといえる。

(3) 卒業後進路

最後に、卒業後の進路について、「国キ卒業後の歩み（お仕事、ご家族、教会のこと）など、お分かち頂ける範囲でお書き下さい」の設問に対しては、「あらゆる分野におけるキリスト者の働き人を」という国キの持つスピリットを表すように、多様な分野での卒業生の活躍を見ることができた。その一方で、今回のアンケート回答で

特に明らかとなった三点に言及したい。

① 高い教会関連への就職率

第一に、教会への就職率の高さである。卒業直後の進路が教会でない者でも、何らかの経験や年数を経たのち、教会関連での働き（牧師、伝道師、教会スタッフ、教育主事、宣教師、牧師夫人など）を経験したことがある者は、全体では45%であった。男女別にみると、男性の57.9%、女性の35.5%が卒業後の一時期、または現在に至るまで継続して教会の働きに関わっていた。

これらはさらにいくつかのタイプに分類できる。第一のタイプは、卒業後、一貫して教会の働きに携わっている者である。例えば、「卒業後から現在に至るまで、教会の牧会・伝道に携っていますが、現在は被災地で誕生した教会に赴任し、災害支援活動、教会開拓、ボランティアの受け入れや地域復興に携っています」といった回答や、「卒業後すぐに母教団の神学校に入学し、3年の学びを経て、母教会から招聘を受け、現在牧会15年目になります」「米国の神学校へ留学。その後は牧会に従事、現在に至る」といったように、神学校を経る場合もあるが、卒業後一貫して教会の働きに携わっている。また、バラチャーチの働きとして、「高校生伝道団体で事務スタッフ。主に会計の責任ですが、高校生たちにもことばを取り次ぐ機会もたびたび与えられ、とても楽しい期間でした」という回答もあった。

また、第二のタイプは、卒業後、一般企業等での経験を経たのちに教会の働きに携わるタイプである。例えば、「3年間病院チャプレンとして勤務。その後、教会の協力牧師として1年半奉仕し、按手。5年半前より主任牧師として奉仕しております」や、「キリスト教の出版、印刷会社に就職し、その後帰郷して契約社員として数年間一般企業で働きました。28歳で直接献身の道を志し、ゴスペルミュージックを学ぶ教育機関に入学。卒業後、教会で伝道師として働いています」といった回答があった。

第三のタイプは女性のみに見られるもので、教会の働きに携わったのち、結婚・出産を機に、専業主婦となるタイプである。例えば、「教会教育主事。結婚後、歯科助手として勤務。現在は主婦です」といった回答や、「神学教育機関へ。その後、5年間伝道師として、青年、子供たちに仕える働きと牧会を体験させていただきました。その中で結婚、子育てにりました」という回答があった。

また、少数ではあるが、「宣教師家族と1年弱生活。後、教会スタッフとして5年。そののち、保育園事務として現在です」というように、教会の働きの後、一般職に

携わる者もあった。

また、教会の働きと並行して一般職に携わる回答もあった。例えば、「教会の教育牧師として招聘されました。その後、働きながら教育牧師をすることに承認を得て妻とクリーニングの個人事業を立ち上げて、お掃除と内装の仕事をしました」といったものや、「準備期間を経て、所属教団神学校で学ぶ。その後は牧師として奉仕中。今仕えている教会が開拓教会なので、福祉関係と家庭教師のアルバイトをしながら牧会しています」といったものがあつた。

このような教会への就職率が高い一方で、一貫して一般職に携わる者たちも多い。例えば、「地元に戻り、専門学校で英語講師として勤務、TOEIC、英検などの資格英語を教えた。その後県内のクリスチャンスクールで非常勤教師として、小学4年生～高校3年生まで英語や聖書、実技科目を教えた」「大学職員」「高級婦人服の販売員。その後、印刷業の営業」「映像製作会社勤務」「温泉の中のエステコーナーで施術者」「3年前より介護ヘルパー。未経験で入り、特別養護老人ホームに1年半、デイサービスへ移り1年4ヶ月になります」「主に苔を利用した屋上緑化、ガーデニング、植物工場内システム、植物工場普及促進など」「複合機・プリンターの作像プロセス・メカ的设计」「クリスチャンの職場で働いたのち、一般の会社で働き、結婚前後に現在の菓子製造業」といったように、教育関連や製造、サービス業に至るまで、その領域には実に多岐にわたるものであつた。

② 高い進学率

アンケート結果から見えた第二の特徴は、卒業後の別教育機関への進学率の高さである。卒業後、さらに別の教育機関（日本国内外の大学院、神学校、専門学校など）で学んだ経験のある者は、全体では41.2%であつた。男女別にみると、男性の73.7%、女性の22.6%が、卒業直後、または一般職や教会での働きの経験を経たのちに別教育機関での学びを終了しており、特に男性はかなり高い比率で進学を経験していた。例えば、「〇〇大学生物学類に編入学し、同大学院に進学。現在は研究と就職活動中です」というように、一般大学へいったん編入した後に大学院へ進学するものもあつた。

またこの進学経験者のうちで、神学校に進学した者は81%であることから、進学の多数が神学校への進学であつたといえる。例えば、一般職の経験を経て後神学校に進学したケースでは、「2年間は就職して一般企業で働きました。その後で、神学校に戻り、卒業後、牧師として10年間牧会した後で、現在、北米において日

本語教会の形成を目指して働きをしています」といった回答や、「キリスト教 NGO の働きに加わり、南アジアでの活動に参加。帰国後、神学教育機関で学んだ後、北米神学校に留学。現在は博士課程に在籍」といった回答がみられた。また、大学院や専門学校への進学に関しては、「看護専門学校へ進み、看護師になり、手術室看護師として働きました」や、「留学資金をためたのち北米の大学にてピアノ専攻。大学院修士号を取得し帰国後は、クリスチャンスクールにてフルタイム勤務」といったように、進学先での学びがその後の職業に結びついている様子が見られた。

③ 高い専業主婦率

アンケート結果から見えた第三の特徴は、専業主婦率の高さである。「障がい児（中軽度の LD や ADHD などの子供たち）の塾でパート（学習支援、美術、リズム体操等の指導）。印刷屋でパート。現在は専業主婦として、子育てに励んでいます」といったように、結婚や出産を機に専業主婦となる回答がみられた。既婚女性の内、68.2%は無業（専業主婦）であり、そのうちの46.7%は牧師夫人であった。内閣府男女共同参画局の『男女共同参画白書』（平成23年度版）によると、「男性雇用者と無業の妻からなる世帯」と「雇用者の共働き世帯」の割合は44%：55%であるが、今回のアンケートでは、63%：36%となっており、日本の一般的な傾向よりも専業主婦の割合は高くなっている³⁹。日本の女性の就業率を示すM字曲線といわれるものでは、女性は妊娠・出産を機に無業となるもの、子育てが一段落する40代に入ると再び就業率が上がるために女性の就業率を示す曲線はM字となる。この曲線に照らし合わせると、現在国キ卒業生の大半が20代から40代で幼い子供を育てる子育て世代であるために、一般的な統計よりも就業率が低いことが考えられるが、しかし例えば2011年リクルート調べによれば、「男性雇用者と無業の妻からなる世帯」の比率が他の年代よりも高くなる30代の既婚者女性の内、働いていない比率と働いている比率は54%：46%であることから、やはり今回のアンケート結果での専業主婦率は日本の同年代女性の平均よりも高い⁴⁰。

しかし、「無業」の分類に入るものの、例えば、「4年間、北米神学校で学びました。M. Div. 取得後に結婚し、現在は北米にて主人は副牧師、私は専業主婦で息子

39 内閣府男女共同参画局 〈http://www.gender.go.jp/whitepaper/h23/gaiyou/html/honpen/b1_s02.html〉 2013年6月26日最終アクセス

40 株式会社リクルートブライダル総研 〈http://bridal-souken.net/research_news/files/soukenRN_110921.pdf〉 2013年6月26日最終アクセス

が二人います。奏楽やスモールグループなどに関わっています」や、「母教会でスタッフとなる。4年後に結婚して信徒として教会に仕える。その間に夫が献身、現在牧師に就任。今年に入り、新会堂建設に向けて動き出した。私自身は、娘1人と息子2人の子育てをしながら、主に児童伝道の働きを委ねられている」といった回答、また「塾講師、教会の子供スタッフ、牧師と結婚して牧会の補助」といった回答からは、統計上は「無業」に分類されるものの、意識の上では「牧師である夫の働きを共に担っている」という認識が強い様子が見られた。

また、参考までに、国外在住経験者（留学、仕事、国際結婚など）は、全体の23.5%であった。男女別にみると、男性の26.3%、女性の22.6%が一時期、または現在に至るまで国外在住の経験を持っていた。ここからは、男女間に比率の大きな差は見られない。例えば、「都内の語学学校に就職し、その後、在学時異文化実習で訪れたオセアニアの国で宣教団体の短期ボランティア」といった一時的な滞在や、「オセアニアの国に家族で移住。一年後、日本で宣教の働きをしていた宣教師と結婚し、それから3年間日本で働いていました。その後再び夫の国に戻って、現地日本語教会で3年、現在は田舎の町で夫と6人の子供たちと暮らしています」といったように国際結婚をきっかけとした者や、また「北米の大学、大学院にてカウンセリング専攻で修士号、結婚。家族セラピーの修士号を取得しました。北米で、中学生、高校生を対象に学校を基盤にしてのカウンセリングを2年した後、アメリカ人の夫と結婚しました。州認定のメンタルヘルス・カウンセラーの資格を取り、クリニックで、乳幼児、子供、家族を専門にセラピーをしています」「北米で神学修士課程を修了しました。その後、一般企業で働いた後、今は、チャプレンになるべく、北米のキリスト教系の病院にて訓練を一年間受けています」といったように、国外への進学をきっかけとしてその後も永住する者などがいた。また、既婚者の内で国際結婚をしている者は13.9%であった。

4 国キ学の今後に向けて—結びに変えて

以上、国キ設立からの24年間の理念と現状を振り返り、またその期間学生として過ごした卒業生から得たアンケート回答を見てきたが、これらを踏まえ、国キの今後の課題として、二点あげたい。

一つ目は、国キ設置当初からの理念の継承である。「世界のすべてにキリストが

おられる」がゆえに、この世界の多様性について学び、そしてその多様性の中でキリストの世界をたてあげる働き人を養成していく使命である。国キ卒業生のアンケートからみた国キ卒業後の働きの方は多様であった。卒業後、そのような多様な領域や職場において信仰を維持しつつ、かつその働きの意義や使命感を確認するためには、その領域もまた「キリストがすべて」治めているという理解は必要不可欠であろう。

二つ目は、世界の変化に寄り添うという点である。倉沢元国キ学科長が1997年の大学案内で「21世紀に向かい、通信網の発展と整備によって、世界のあらゆる情報に国境を越えてアクセスが可能となるボーダーレス時代が到来し、また、色々な国の人々の地球規模の交流によって、文化や習慣の違う人々が一緒に生活するモザイク社会が形成されています。在日外国人や在外日本人の増加という現実、世界宣教への私達に対するチャレンジです」⁴¹と指摘しているが、そのような状況は今日より顕著になっている。日本に滞在する在日外国人である外国人登録者数は2011年末で207万8,480人であり、日本で生活をする約60人に1人の割合となっている⁴²。今回アンケート回答者では、23.5%が国外在住経験者であったが、国外においてはもちろんのこと、国内においてもグローバル化の波に対応していくための異文化理解能力及び語学能力がますます求められるだろう。

一方で今回のアンケート調査の課題と限界もあった。今回の回答率は全国キ卒業生の約18%だったため、国キ生全体の声を反映しているとは言い難い。国キの全体像をさらに把握する必要性を感じる。そのうえで、国キのもつニーズを掘り起こしていきたい。

国キの使命とは、TCUがモットーとして掲げるキリスト教世界観に立ち、一般教養をも含む幅広い視野を身に付け、そして国キの理念である「異なる」人々・文化を認識、理解し、そしてさらにはその多様な文化における多様な人々と協働できるキリスト者としての人格形成を目指すものといえるだろう。

41 倉沢正則「異文化理解って何だろう？」（「大学案内」東京基督教大学、1997年、18頁）

42 外務省領事局政策課〈<http://www.mofa.go.jp/mofaj/toko/tokei/hojin/12/pdfs/WebBrowse.pdf>〉2013年6月26日最終アクセス

[資料]

(1) 国キ学沿革

1990年4月	東京基督教大学 神学部 国際キリスト教学科 開設 初代 国際キリスト教学科長 湊晶子教授就任
1994年4月	第2代 国キ学科長 トーマス・ワイズレー教授就任
1996年4月	第3代 国キ学科長 倉沢正則助教授就任
1996年	TCU-Biola Exchange Program (短期交換留学プログラム) 開始 (2013年度までに、19名が参加。うち13名が国キ生)
1997年	「海外語学研修」(英語研修) 開始
1999年	「異文化実習」開始 (2013年度までの実習先国は、カンボジア、フィリピン、シンガポール、韓国、バングラデシュ、バブアニューギニア、インドネシア、スリランカ、中国、エチオピア)
2001年	日本宣教コース設置 TCU-Biola Double Degree Program 開始 (2013年度までに2名がプログラムを終了。うち1名が国キ生)
2006年4月	第4代 国キ学科長 西岡力教授就任
2008年4月	国際キリスト教学科を国際キリスト教福祉学科に改称し、同学科内に国際キリスト教学専攻とキリスト教福祉学専攻を開設 初代 国キ福祉学科長 稲垣久和教授就任 初代 国キ学専攻長 西岡力教授就任 日本宣教コースは神学科へ移行
2010年4月	第2代 国キ学専攻長 宮脇聡史准教授就任
2012年4月	第3代 国キ学専攻長 西岡力教授就任

(2) 国キ学卒業生数

1期生 (1994年卒)	20名
2期生 (1995年卒)	18名
3期生 (1996年卒)	19名
4期生 (1997年卒)	13名
5期生 (1998年卒)	18名
6期生 (1999年卒)	14名
7期生 (2000年卒)	14名

8期生 (2001年卒) 18名
9期生 (2002年卒) 14名
10期生 (2003年卒) 12名
11期生 (2004年卒) 9名
12期生 (2005年卒) 17名
13期生 (2006年卒) 25名
14期生 (2007年卒) 15名
15期生 (2008年卒) 10名
16期生 (2009年卒) 12名
17期生 (2010年卒) 7名
18期生 (2011年卒) 10名
19期生 (2012年卒) 8名
20期生 (2013年卒) 3名

合計：276名 男性109名 (約39.5%)、女性167名 (約60.5%)